『南支日報』(1942－1944)とその文芸欄

Peijun WU (呉佩軍 : Associate Professor, School of Foreign Studies South China Normal University)

✉ wupeijun@m.scnu.edu.cn

(中国) 華南師範大学外文学院日本語科准教授。植民地文化史、日本近代史研究。主著に『竹内正一が描いたハルビンの都市表象：「ギルマン・アパート点描」「馬家溝」を中心に』（『跨境：日本語文学研究』, 2018）、編著『偽満洲国文艺大事記』（『偽満洲国文学資料整理と研究』）（北方文藝出版社, 2017）など。

The Role of the *Nanshi Daily* (1942-1944) and its Literary Page

The *Nanshi Daily*, published in Guangzhou during the war, was the Japanese-language newspaper of the Sunlin Association, published under the Japanese Governor General of Taiwan. It was also the organ of the press bureau of the Japanese expeditionary force in Nanshi. This newspaper supported the propaganda activities of the Japanese occupation forces, and also promoted the customs of the South China region. The literary page of this newspaper mainly contained pieces that were related to pacification activities, the Guangdong region, and criticism of the Chongqing government, the US, and the UK, as well as literary reviews that often encouraged support for the Greater East Asia War. A large number of the contributors of these articles were Japanese residents who migrated to the South China region, and Japanese occupation soldiers. Therefore, many articles published in this literary page included the accounts of people's personal experience, essays, and haiku.

Keywords *Nanshi Daily*(南支日報), Literary Page(文芸欄), Propaganda (プロパガンダ), Support for the War(戦争協力)

『南支日報』は戦時中の中国広東省広州市における唯一の日本語新聞として、1938年に発刊、1945年に廃刊したものである。『南支日報』には文芸欄が設けられ、文芸作品が掲載されていた。これらの文芸作品から、陥落期の広州の日本語文壇の状況と日本占領軍当局による宣伝戦の実態が窺われる。戦乱で、『南支日報』の一部分は紛失されていたが、残った部分は、日本とアメリカおよび香港の図書館に所蔵されている。内訳は、日本の国立国会図書館が、『南支日報』1939年6月12日から1940年10月31日まで、1944年1月27日から1945年7月16日までのマイクロフィルムを、香港大学馮平山図書館が1942年6月10日から1944年10月28日までを所蔵している。本稿は、香港大学馮平山図書館に所蔵される資料に基づき、戦争後期の『南支日報』とその文芸欄を考察するものである。

一 『南支日報』創刊の時代背景

『南支日報』は日本植民主義拡張の産物でもあり、宣伝戦の産物でもある。

(1) 『南支日報』の創刊は台湾総督府華南新聞工作の展開と関わりがある。

甲午戦争(日清戦争)以後、台湾は日本の植民地だけではなく、「南支・南洋」に勢力を伸ばす拠点と位置づけられた。第二代総督桂太郎は「台湾経営」について、「台湾ノ施設経営ハ単ニ台湾ノ境域ニ止ラズ、更ニ大ニ對外進取ノ確策ナカルベカラズ」「将来ハ更ニ進ンデ支那海ヲ圧シ、南清ノ沿岸ト密接シ、南洋ノ列島ト交通シ、台澎ノ地利ニ、抛テ大ニ国勢伸長ノ策ヲ採ルベシ」¹と、台湾を踏み台として中国華南と南洋地域へ「南進」すべきだと明確に主張していた。次期の総督児玉源太郎と民政長官の後藤新平も「台湾統治ノ既往及将来ニ関スル覚書」の中で、「南進ノ政策ヲ全ウするニハ内統治ヲ励シ、外善隣ヲ努メ、可成国際上ノ事端ヲ生ズルヲ避ケ、対岸清国並南洋ノ通商上ニ優勢ヲ占ムルノ策ヲ講ズル」²ことを述べていた。この後、台湾総督府による「南支・南洋」への進出が正式的に展開された。台湾総督府による「南進」は四つの時期に分けられる。第一期は1895年から1914年第一次世界大戦勃発までの揺籃期で、第二期は1914年から1923年関東大震災までの大正南進期、第三期は1923年から1937年日中全面戦争勃発までの沈滞期で、第四期は1937年から1945年までの昭和南進期である³。第一期の揺籃期においては、台湾総督府は、新聞の刊行と病院や学校の設置によって、「文化工作」を行うと同時に、台湾銀行・華南銀行・三五会社の支店を設け、資本による拡張を計画した。福州では、1897年、日本人の手によって『閩報』が発行され、厦門では1907年、台湾籍の江保生によって『全閩新日報』が発行され、いずれも台湾総督府の援助によって維持されていたのである。第二期の「大正南進期」に入ると、台湾総督府民政長官の下村宏が中心として、学校、病院、新聞を三本柱とした「文化工

1 鶴見祐輔『後藤新平』第2巻(勁草書房、1965)、p.414.

2 中村孝志編『日本の南方関与と台湾』(天理教道友社、1988)、p.7.

3 中村孝志編、前掲書、p.5.

作」が積極的に推し進められた。下村宏は「南支一帯ノ言論ヲ左右シ、以テ我カ南支政策ノ遂行ヲ期セント欲セバ、須ラク対岸枢要ノ地ニ於テ新聞ヲ刊行セサルヘカラス」⁴として、中国華南地域に情報宣伝用としての言論機関の設立、維持を主張した。1917年11月、民政長官下村宏、台湾銀行副頭取中川小十郎は資金各一千元を醸出し、財団法人善隣協会を設立、『閩報』、『全閩新日報』等を買収し、『南報』⁵等の新聞と雑誌を創刊した。このように、総督府の華南新聞政策は新たな時期に入ったのである。第三期の沈滞期には、「南進」の勢いが弱くなったが、第四期の南進期に入ると、日本占領軍の支持を得た善隣協会は、広州に勢力を伸ばし、中国人が経営した新聞社を接収し、『南支日報』の創刊に乗り出した。さらに、広東省の汕頭、タイのバンコックにおいても、新聞社を創設し、『香港日報』の経営権を獲得した。下の図のごとく、中国華南地域において、メディアのネットワークを構築した。

善隣協会経営新聞 一九四二年末時点

題名	発行地	創刊	種別	発行部数	摘要
全閩新日報	廈門	一九〇七	漢文	二八〇〇	日刊四ページ
同	〃	一九三八	和文	二八〇〇	〃二ページ
粵東報	汕頭	一九三九	漢文	四六〇〇	〃四ページ
汕頭日報	汕頭	〃	和文	一三〇〇	〃二ページ
広東迅報	広東	一九三九	漢文	一二〇〇〇	〃四ページ
南支日報	〃	〃	和文	八〇〇〇	〃四ページ
香港日報	香港	一九三八	漢文	八〇〇〇	〃四ページ
同	〃	一九〇九	和文	五〇〇〇	〃四ページ
ホンコン・ニュース	〃	一九三九	英文	二〇〇〇	〃四ページ (占領前は週刊)
カーオ・パーブ	バンコック	一九三九	タイ文	四〇〇〇〇	〃八ページ
盤谷日報	〃	一九四二	和文	一三〇〇	〃四ページ
中原報	〃	一九四二	漢文	二五〇〇〇	〃四ページ

(「台湾総督府事務成績提要四八」その他により作成)⁶

(2)『南支日報』の創刊は広州日本人居留民社会の成立とも関係がある。

中国華南地域随一の港と第一位の大都市として栄えた広州は、アヘン戦争後、その地位がホンコンに取って変わられた。日本の商社と居留民もホンコンに集中していたが、1880年代後半から、ようやく広州に北上した。日本外務省も広州の重要性に鑑み、1888年に広東領事館を設置した。広東領事館は1890年閉館後、1906年に再び開館した。その後、日本と広州の貿易の規模の拡大とともに、広州の日本人居留民の人数も次第に増えて、1890年の10余人から1907年の200余人に急増した⁷。第一次世界大戦勃発後、日本と広州の貿易額はさらに伸びて、日本人

⁴ 台湾ト南支那トノ関係及現在ノ施設並将来ノ方針／台湾総督府政況報告並雜報(第十八画像目から)(所蔵館：外務省外交史料館),JACAR B03041652300.

⁵ 『南報』は1917年、善隣協会の援助によって廈門にて発行されていた週刊である。1923年廃刊。代表者山下伸太郎。中下正治『新聞にみる日中関係史：中国の日本人経営紙』(研文出版、1996)による。

⁶ 中村孝志編『日本の南方関与と台湾』(天理教道友社、1988), p.29.

⁷ 外務省通商局編『清国事情第二輯(清国事情第貳輯)』, 1907), pp.849—850.

8 平野健『広東居留民団誌』(南支日報社、1945)、p.34.

9 第21軍は、1938年10月12日にバイアス湾に上陸し、10月21日に広州を攻め落とし、11月2日に仏山など珠江デルタの主要都市を、翌年6月に汕頭を占領した。

居留民の人数も一段と増加し、1930年500名を超えた。1937年中日戦争勃発後、日本人居留民が一時的に国内に引き揚げたが、1938年広州陥落後、再び戻り、1939年の4706人から1940年の7183人、1943年8月の11731人(台湾人と朝鮮人を含め)へと急増した⁸。日本人居留民社会の成立という背景の下で、日本語の刊行物を販売する堀内書店が創立された。このようにして、読者群の存在と販売ネットワークの構築によって日本人向けの新聞を発行する基盤が出来上がった。

(3)『南支日報』は日本軍に主導された宣伝戦の産物である。

中日戦争勃発後、1937年11月20日に大本営陸海軍報道部が設置され、その任務は「戦争遂行に必要な対内・対外並に対敵国宣伝報道に関する計画及実施を任務とす」と規定された。それにより、戦争中の言論統制が強化されるとともに、思想宣伝戦の面にもいっそう焦点が当てられていた。

1938年10月21日広州陥落後⁹、第21軍(翌年南支派遣軍と改称)司令部が広東特務機関、海軍特務部、広東総領事館、台湾総督府などの協力機関とともに、植民支配体制を確立した。特務機関の成員と従軍記者および兵隊作家からなった軍報道部も設けられた。

第21軍は兵力不足で全面的な攻撃ができなくなった。それに対して、中国国民党の軍隊と政府が広東省北部の曲江に撤退し、防御体制を強化した。一方、国民党系と共産党系のゲリラ部隊が日本軍の占領地域において活躍して度々日本軍の拠点に攻撃していた。このような背景の下で、日本軍は、中国軍隊の活動した地域で掃討作戦を展開すると同時に、傀儡政権の樹立により、占領地域に対する支配の基盤を固めることになった。さらに、中国人の抗日意志を軟化させ抗日団体を取り締まるために、日本占領軍は、傀儡政権・台湾総督府・興亜院・「南支調査会」から協力を得て、宣伝戦を展開した。

善隣協会は第21軍報道部からの支持を得て、宣伝戦の一環として、中国語の『広東迅報』社と姉妹紙の『南支日報』社を作った。両紙は「南支派遣軍」の機関紙として、日本軍の武勇と功績を湛え、戦争の宣伝に力を入れた。

21軍報道部が光復中路にある『国華報』社の印刷所と機械を、長堤靖海路にある胡文虎所有の「星粵日報社」の作業場と器械を徴用し、『広東迅報』社と姉妹紙の『南支日報』社に与えた。当該新聞社は、ここに引越した後、従業員を拡充し、日刊紙へと変更した。

『南支日報』は広州市長堤新填地1号に発行所と印刷所を設置した。そして、香港中区利源東街5号に香港販売店を、広東省仏山市屏平路1号に仏山支局を、大阪市北区堂島浜浦に大阪支局を、東京市京橋区銀座に東京総局を設けた。当該新聞の販売ルートは、二つに分けられる。一つは、広東省に駐屯した日本占領軍の各部隊と植民支配機関、日本人居留民団、日本人学校に配布するルートで、もう一つは、占領地と日本国内の書店を通して販売するルートであった。1941年、太平

洋戦争勃発後、販売範囲を東南アジア占領地まで広げ、刊行部数も8000に上った。

『南支日報』は『広東迅報』に従属しているので、両社の従業員は同じである。社長唐沢信夫、編集長山田某、翻訳長台湾人の徐毓英である。当該新聞社は社長室、編集部、営業部、調査部、印刷部、五つの部門を設けた。唐沢信夫は「大正十二年三月早稲田大学法学部ヲ卒業、同年四月東京朝日新聞ニ入社、同十三年七月転ジテ新愛知新聞ニ入ル、同十四年十月同社ヲ退キ台湾日日新報社ニ入社、ソノ後新高新報ヲ創立、同社社長トナル。昭和十年十一月台北市會議員ニ當選、同十三年広東ニ渡リ広東迅報社長トナリ、『広東迅報』ト『南支日報』ヲ創刊シタ」¹⁰。彼は新聞社を経営すると同時に、広東特務機関の囑託として、メディア統制に携わった。

¹⁰ 興南新聞社編『臺灣人士鑑』(興南新聞社, 1943), p.95.

二 『南支日報』の文芸欄

『南支日報』は日本占領軍、日本人居留民と台湾籍の中国人にむけて発行する日本語の新聞であると同時に、「南支派遣軍」の機関紙でもある。したがって、軍事・政治と経済の報道を重点においた。当該新聞は1938年12月に『広東迅報』の日本語コラムとして創刊し、後に独立し、1945年8月15日廃刊した。独立当初の『南支日報』は四枚紙の小型新聞であり、第一版面は、華南戦線と南洋戦場の記事、第二版面は、重慶政府および米英に対するマイナス報道、第三版面は、広東省日本人居留民の戦争協力、宣撫班による宣撫活動についての報道、第四版面は文芸欄である。太平洋戦争勃発後、物資の欠乏が厳しくなり、新聞の紙面も縮めざるを得なくなった。このような背景のもとで、『南支日報』も1943年11月から、二版面に縮小し、同盟社のニュースと広東関連のニュースを載せるようになった。

『南支日報』の文芸欄には、文芸評論、俳句、随筆、体験談、連載小説のような文芸作品が掲載されている。これらの文芸作品は内容別に見ると、宣撫活動に関する作品、重慶政府と米英を非難する文芸作品、広東を題材にする作品、「大東亜戦争」協力を鼓吹する文芸評論などがある。

執筆者は三種類に分けられる。一つ目は、当該新聞社の記者である。二つ目は、一般の日本人居留民と台湾人などである。三つ目は、火野葦平のような「南支派遣軍」報道部と宣撫班の成員及び日本軍の兵士などである。四つ目は、武者小路実篤、打木村治、福田清人、新田潤、真杉静枝など日本国内の作家である。

(1) 宣撫関連の文芸作品

広東の宣撫工作は軍の宣撫組織・広東傀儡政権の宣伝処及び親日団体の三者によって行われた。1938年、第21軍司令部は宣撫部、宣撫処、宣撫班を設立した。

傀儡政権としての汪兆銘系広東省政府も宣伝処を設けた。岩井武男などの文化人も「共栄会」「中日文化協会」などの親日団体を結成し、協栄印書館を設立して、「共存共栄」を宣伝する書籍と『新亜』『華南公論』を刊行した。

上述した宣撫機関は、宣伝・植民支配・治安維持・救済と医療・実地調査などに従事していた。宣伝工作においては、宣伝・演説・ビラの配布・プロパガンダ映画の放映だけではなく、日本語教育を展開し、台湾と日本国内に中国人留学生を送った。

この宣撫活動の政策に応じて、『南支日報』は宣伝戦と思想戦を論ずる評論を掲載した。「世界大戦五年と宣伝戦」(加瀬俊一、1943年9月13日、16日、17日)は、宣伝の重要性を強調した上で、第一次世界大戦と第二次世界大戦における対敵宣伝の成功例と宣伝策略を紹介している。「言論人と思想戦」(池島重信、1944年1月12日、13日、14日)は宣撫機関の成員と文化人が国民の徹底動員に力を尽くすべきだと宣揚している。また、当該新聞社が一連の座談会を開き、宣伝戦の成果を宣揚する。1942年11月19日、広東省宣伝処と共同で興亜劇院(長堤大三元)で「宣伝工作戦士の座談会」を開き、「新中国の建設と皇軍の真意を和平地区の民衆に認識理解させる」「大東亜戦以来民衆漸く自覚」「接敵地区では平和を渴望」と宣伝戦の成果を評価した。華南画劇協会、共栄会、中華電影公司華南支社巡回映画班22人、山崎軍報道部長もこの座談会に出席した。

宣撫に関する評論と座談会についての記事の他に、宣撫班員の体験談も掲載されている。「せんでんはん日誌」(報道部石田一郎、1942年6月17日、18日)は広東戦地宣撫の日誌を掲載している。「宣撫班雑記：家鴨公司、自転車に乗って、残飯物語」(松波幸三郎、1942年7月12日、7月23日、8月7日、8月25日)も、宣撫班員が中国人に食料を与え、日本を信頼し新政権を擁護させようと宣伝する体験を述べている。「陣中風景」(塩野宣傳班員、1942年7月20日—30日)も、日本軍医が従化掃討作戦で負傷した中国人に外科手術を施し命を助けたことを述べて、「無敵皇軍の愛情」と「蹄鉄兵士の労苦」を讃えている。「南支前線対敵放送宣伝戦」(1943年8月12日)は「共栄会」と汪兆銘系の広東省政府宣伝処に所属する中国人宣撫班員が、砲撃をよそにして国民党軍隊に対して宣伝する勇ましい姿を描いている。「中国青年宣伝隊員に訊く」(1944年8月4日、5日)も、「大陸打通作戦」の時、藤彦一郎の指導を受けて、清遠の前線で活動した共栄会の中国人宣伝隊と医療班が「伝単を揺き、標語を貼り付け」「同胞に真実を伝へ」、「米空軍の空襲を受けた避難民を救助」したことを述べている。

宣撫班の隊員の体験談の他に、従軍ペン部隊に編入された作家の前線報告も掲載されている。例えば、真杉静枝は「女流作家の前線報告：中支の婦人捕虜」(1942年9月4日)において、中国人女性捕虜の姿を描いている。「先日、中支方面の戦線を訪問している時に、漢口で収容されている支那軍の捕虜に会った。捕虜

は『保安警備隊』という名をつけられ訓練されて、和平地区に起用されることになった。捕虜たちの生活は明朗である。捕虜された婦人は趙菊英という、二十四歳。『アルコール中尉』という綽名がある。夫は第九戦区の主計少佐で、捕った時は七ヶ月の妊娠をしている。子供が生まれたとしても、母親がまるで母性本能を呼びさまされないやうで、やがて子供が死んだ。女の捕虜はまったく捕虜になった苦痛はない。笑顔になってしまうぐらい、ニコニコした、いかにも無智な、ぼしゃぼしゃした若い女なのである。」

広州陥落後、広東総領事館、台湾総督府広東出張所、中日文化協会などが日本占領軍の支持を得て、中日語言学校などの日本語学校を設立し、市内の各中小学校にも日本語の教科科目を設けた。また、天理教布教師も広州に天理日本語学校を設け、21軍所属の宣撫班も占領した地域において中国人向けの日本語教室を設けた。『南支日報』はこの日本語教育活動を宣撫活動として大いに報道した。「日語学校風景」(高野佐武朗、1942年8月5日)は中日語言学校を訪問し、中国人生徒の熱心な勉強ぶりを記している。「天理日本語学校」(1942年8月15日)も、天理教の布教師が多宝路にある天理華南傳教廳で日本語学校を設け、日本語教育を推し進めたことを評価している。日本語教育の成果を示すために、1943年4月19日、『南支日報』は中日語言学校高級班の優秀生徒である孔慧敏と陳佐生の作文、「私の父」と「或る日」を掲載している。

また、『南支日報』留学生派遣についても報道した。1944年7月1日、「留学生父兄懇親会文協主催で田中氏を囲み」と題して、座談会を報道した。同年7月5日、「本年度留日派遣学生省政府で試験実施」と題して、省立第一職業学校で行われた留学生選抜試験を報道している。

(2)重慶政府と米英を非難する文芸作品

華南占領地域は広西省・湖南省および西南地域など国民党政府の銃後へ侵攻する基地と位置づけられたので、『南支日報』は国民党政府と後ろ盾と見なされた米英を非難する任務を担っており、関連記事もよく掲載していた。

『南支日報』は、日中戦争と太平洋戦争が東アジアの民族を米英植民支配から解放する戦争であると、正当性を宣揚すると同時に、米英による侵略史を非難している。「英國の支那侵略史」(1942年8月25日)は、「南京条約茲に百年、英國の対支貿易は砲撃に依つて開始」と批判し、「林則徐とは如何なる人乎」は、林則徐を米英排撃の先覚者と讃えている。米英の侵略史を非難するだけではなく、米英の現代文化も批判している。「文化の仮面に官能を蝕む敵アメリカの侵入」(1943年3月8日)は米英系のキリスト教会の布教師が教育と医療を手段として、中国の文化を蝕み、米英の映画も享楽主義を宣伝していると非難している。「アメリカ敵を衝く特輯米国文化の底にあるもの」(実田彬、1943年8月30日)も米国文化の劣悪性を批判している。

11 1925年6月23日に広州の英仏租界地の近くで反英デモ隊にイギリス軍が発砲して多くの死傷者を出した事件である。

『南支日報』は米英を非難する評論の他に、文芸作品も掲載している。1942年9月9日に、米英撃滅の漫画を募集し、1943年3月に「撃ちてしまふ」週間協賛作品を募集し、「神富士」「虓怒」などの詩を掲載している。1944年7月、興亜文学賞を設け、作品を募集した。馮度の創作した小説「6・23路」(沙基惨案¹¹)を描いた小説が入選した。馮度は東莞県立一中出身、東亜連盟訓練班を経て、文協分会留日学生に選抜され、明治大学政経科に留学している者である。

米英を非難すると同時に、『南支日報』に掲載された文芸作品は、重慶の悲惨な世相を大げさに描いている。「抗日の毒筆翳を潜む煩悶する重慶作家連」(1943年8月13日)は中国人が「最近重慶の殺人的物価暴騰に漸く失望のどん底に陥り、今更の如く抗戦の前途に疑問をきき始めている」、「巴金、謝冰莹、田漢、鄒韜奮、老舍の作品は貧弱極まる。主題は生活の苦痛、戦争の悲惨ばかりである」、「巴金だけ生活を見捨ててペンを振って、『宇宙風』に寄稿している」と報道している。「苦悶する重慶言論界」(1943年11月17日、18日)も、生活に悩む抗日作家が蒋介石反対活動に身を投じて、抗日の立場を取った新聞も動揺したと述べている。抗戦都市重慶の苦悶(1944年8月6日、8日、9日、10日)は、米軍を救主ならぬ危病神と不逞なる米鬼、国民党政府の役人を鼠族と風刺し、空爆を受けた重慶の市民の悲惨さを描いている。「重慶庶民の希ひ」(1944年8月11日)は蒋介石を打倒し、汪兆銘の和平運動に参加せよと重慶の市民に呼びかけている。

桂林で活躍した抗日作家も非難の対象となった。「桂林の作家群抗日作家の末路?!(上)」(原文の筆者は寒流と署名されている、1943年11月3日)は「桂林の文壇も冷落れた、文化都市の看板は今時代の風雨の中に剥げつつける」、「抗戦陣営の社会的破綻は極めて問題にする」、「指導層に悲惨ともいふべき生活苦の嵐襲い掛かる」と抗戦陣営文化界の貧困を述べている。文芸雑誌の編集主任王魯彦は千元の給料で一家五人の生活を辛うじて支えたが、一年あまりの病床生活で仕事を失った。職業作家の艾蕪も大勢の子供を抱えていたが、出版界の不景気によって印税が入らない。穆木天夫婦は東北の人として、流浪の生活を十年続けた。田漢も一家八人の重荷に耐え切れない。東北作家の端木蕻良、巴金、田漢、欧陽予倩も生活苦に喘ぐ。「桂林の作家群火の消えた出版界(中)」(1943年11月5日)は人気作家巴金が全く沈黙に落ち、曲江芸術専科学校に勤務している欧陽予倩も生活苦に喘ぎ、翻訳老大家の胡仲持と『人間世』の編者周鋼鳴および監督の蔡楚生も痩せ衰え、最低の生活条件も維持できないと述べている。「桂林の作家群無気力な抗日文壇(下)」(1943年11月6日)は西南商専で勤務している林煥平や孟抄などの作家が苦境に冬眠していると語っている。

これらの報道は、重慶と桂林の市民の悲惨な生活状態を大げさに描き、国民党政府を非難するために作られたものであるが、戦争の残酷さを読者にも伝えた。作者は政治宣伝のために新聞記事を創作したが、空爆と経済封鎖による被害

の一側面も読者に伝えた。

上述した「桂林の作家群」は中国語に訳され、葉靈鳳と戴望舒によってホンコンで刊行された週刊誌『大衆週報』第2巻第8号(1944年1月刊行)に転載された。

(3) 広東題材の文芸作品

『南支日報』は、広東の民族・歴史に関する随筆と俳句を数多く掲載した。

『南支日報』の編集人員は「蛋民」という水上住民に興味を持っていたので、関連記事を数多く掲載している。「蛋民が齎した韶関の地獄相窮乏困憊を離反：希望の片鱗なき暗黒な生活」(南支〇〇前線にて七、二九、本社特派員發、1942年7月31日)は、国民党の支配地域に生活した悲惨な蛋民を描いている。「世界的奇習—情緒豊かな花艇—水上に漂泊不定の日を送る蛋民」(1942年8月23日)、「蛋民船を訪ねて—共稼ぎに獲物も山と—黄昏の中を家路へ—情緒纏綿たる蛋民の夫婦生活」(1942年8月26日)、「蛋民船を訪ねて—新時代の息吹きに—蛋民も陸に進出—」『中華全國風俗志』の廣東の蛋婦」(1942年8月27日)などは、「蛋民」を訪問し日常生活を述べている。また、「広東風物：蛋民船」(山田朝夫、1942年12月19日)と「蛋民船をうたふ」(清水葩志芽、1943年3月11日)は「蛋民船」の特色を描いている。1944年2月3日に、「初日の出並びがかれる紫洞艇」(紫洞艇は蛋民船の別称)という岡本芳江の詠んだ俳句を掲載している。そして、謝為何の著した随筆「蛋民を語る」を日本語に訳して、1943年5月4日、5日、6日に連載して、蛋民の種類、人口、教育、習俗、生活、信仰を全面的に考察している。

広東の歴史に関する随筆も多い。「洪秀全由縁の地を探る」(1942年8月20日、22日、23日)は花都を訪れ、貧農に育つが、幼少より驚く秀才になり、十二、三歳で「四書五経」を暗誦できるという洪秀全の平凡ではない少年時代を描いている。「姑娘の男女平等論は“劍蛾”が興って太平天国一女傑物語」(1942年10月31日)は太平天国の女傑を描いている。他に、「広東今昔物語」、「広東今昔譚」、「広東史話南越傳」(粵華樓主人作)など広東の歴史を紹介する随筆も連載されていた。

『南支日報』は陥落後の広東を美化する作品も掲載した。「広東の夜風景：惠愛路の果物屋」(1942年9月3日)と「広東の夜風景：海珠橋に聴く」(1942年9月5日)は陥落前後の広州の夜景を対照的に描きながら、日本軍による支配の正当性を称えた。「広東の風物帖素馨花下」(1943年8月21日)は広東の花を描き、日本軍の功績を賛美した。

これらの文学作品は、占領地の文化を獵奇的な視角から描くと同時に、「指導民族」としての日本人文学者の優越感を示している。

(4) 「大東亜戦争」協力を鼓吹する文芸評論

1937年日中戦争勃発後、思想統制とメディア統制が強化された。文芸界も動員されて、戦争鼓吹に駆り立てられた。この政策に応じて、『南支日報』も文学者の

戦争協力を鼓吹する文芸評論を掲載した。岩上順一は「事変から戦争へ：文学界の推移展望」(1942年7月20日)において、報道記録の重要性と作家の転換を強調している。長谷川如是閑は「大東亜文化の建設と日本」(1943年1月1日)において、文学者が民族文化と東亜文化の復興、南方民族の解放などの事業に身を投じるように呼びかけている。浅原六朗も「大東亜文学の構想」(1943年5月22日)において、指導理念的具體化と新しき精神の成熟の重要性を強調している。文学報国会評論部参事の近藤春雄は「大東亜文化の構想」(1944年1月15日)において、文学至上主義の政治的根柢の脆弱を指摘し、大東亜宣言建設要綱を徹底的に実施し、従来の文学活動はジャーナリスティックな意味では応用策的では有り得ても、文学自体がより大きな国策政治の中に融合すべき、文学者が率先挺身してその実現に寄与すべきと呼びかけている。

文学作品についての評論も多く掲載されている。例えば、寺崎浩は「時局性と芸術性」(1942年12月4日)において、芥川賞候補の作品「山彦」が時局を無視し、「長江デルタ」も横光利一の「上海」を真似している、文学者は現地において支那人と交わり、支那人の生活の中へも踏み込んでいくべきだと主張している。「南支文学の中に潜むもの」(1944年4月15日)は池田享の「花子」、山辺耕造の「二人の青年」、石田一郎の「榕樹の部落」などの現地文学を分析し、日本人による実践活動を通じて新しい文化形成への境地を開拓していくところに大東亜文化造立への具体化と尖兵の任務が与えられるわけであると主張している。

俳句、短歌、詩歌も掲載されている。ジャーナリストの八木沼丈夫¹²は主宰として「短歌中原広東支社」を作り、沙面にある八木沼の邸宅にて定期的に句会の例会を行っていた。他に、亜熱帯句会と珠江句会もある。『南支日報』は南日俳壇と愛国百人一首などのコラムを設けて、俳句と短歌を掲載している。広東省の日本人居留民と兵士は、作家としての素質が足りず、小説より随筆と俳句及び短歌などの初級作品しか創作できない。そのため、『南支日報』に掲載された随筆と俳句が多い。

随筆・俳句・文芸評論の他に、連載小説も掲載されている。火野葦平の怪談小説「怪談宋公館」、喬伸二の恋愛小説「世紀の英雄」、木村荘十の通俗小説「革新の怒涛」、「高丘親王」、などが挙げられる。『南支日報』の読者の殆どは広東省の日本人居留民と兵士であった。これらの審美レベルの低い読者のために、猥雑的で通俗的な文芸作品もよく掲載されている。

三 終わりに

1937年盧溝橋事変勃発後、日本国内で戦時体制が成立すると同時に、メディア

¹² 八木沼丈夫(1895—1944)は、ジャーナリスト、歌人。1917年渡満、大連の『満洲商業新報』の主筆として新聞の運営に携わった。1932年、「満洲国」の宣伝工作を担当した。1937年「盧溝橋事変」勃発後、日本軍の軍属として、華北地域の宣撫活動を指導した。1940年代、広東に南下し、華南地域の宣撫活動に従事した。

統制も強化された。中国の日本軍占領地においても、日本占領軍当局によって、メディア統制のネットワークが構築された。中国華南地域では、台湾総督府系統の善隣協会によって運営された『南支日報』などの新聞も、日本占領軍の支配下に置かれ、占領軍当局の機関紙に改造された。

『南支日報』は、『香港日報』（日本語版）、『全閩新日報』（日本語版）など善隣協会の新聞と同じように、日本人居留民に対して、上意下達と戦争動員を行い、宣伝戦をバックアップした。

一方、『南支日報』は自分なりの特色を持っている。戦時中の広州は日本軍にとって極めて重要な基地である。日本「南支派遣軍」は、広州を根拠地として、広東省北部に撤退した中国軍と対峙するだけではなく、広西省の中国軍に侵攻していた。『南支日報』の記者も従軍して戦況を報道し、宣撫活動に参加した。従って、当該新聞は華南地域の別の日本語新聞より、戦況の進展と広西省・重慶の状況についての報道を重要視している。文芸欄にも関連の作品が数多く掲載されている。

付記 この文章は中国国家社会科学基金重大課題「近代以来中日文学関係研究と文献整理(1870—2000)」(17ZDA2777)の段階的研究成果である。